

# 陸戦研究

## ■優先打撃目標選定要領

—— 重心(CG)と致命的脆弱性(CV)の視点から ——

2015

4

月号

陸戦学会

## 結局動かなかった日朝の外交交渉

拓殖大学海外事情研究所教授

荒木和博

(予備陸曹長)

昨年8月号の本誌拙稿「北朝鮮、そして東アジアの動向と日本」で日朝間のストックホルム合意に始まる日朝協議に疑義を呈したが、案の定合意から10か月が経過した現状でも、事態は何も進展していない。

北朝鮮の宋日昊日朝国交担当大使は9月初旬、共同通信と会見し、拉致被害者の安否を含めた日本人に関する再調査について、いつでも日本側への最初の結果報告ができる状況にあるとの認識を示した。しかし同月中旬になって北朝鮮は日本政府に対し「まだ初期段階」であることを理由に最初の報告の先延ばしを通告してきた。さらに9月29日、中国瀋陽で行われた日朝協議で宋日昊は日本代表団の平壤訪問を提案。事実上自分に権限がないことを明らかにした。

それでも宋日昊の言葉に従い日本政府は10月28日、29日に伊原純一・アジア大洋州局長を団長とする代表団を平壤に送った。もともとそれによって進展がある可能性はほとんどなく、代表団の派遣については各方面から強い反対があった。10月21日に行われた拉致問題と野党協議会（与野党の拉致問題対策本部の代表者と政府との協議会）でも各党から出た意見は同様だったが出席した安倍総理は「粘り強く交渉を続けることが必要」と押し切っている。

北朝鮮側はこの訪朝を日本以外（主に中国）のマスコミにも公開し、国際的なアピールに使おうとした。最初から責任者とされる特別調査委員会の委員長徐大河が出てきたのは意外だったが、「皆さんの訪朝について、日本でいろいろと食い違った主張が提起されていると承知している」「政府間の合意を履行

しようとする日本政府の意志の表れとして正しい選択だ」という徐の発言からすれば、北朝鮮側が日本の世論を意識し、また国連で進められている北朝鮮人権決議にブレーキをかけるためだったのだろう。しかし結局訪朝は日本にとって何の成果もなく終わった。

10月31日、記者会見で菅義偉官房長官は北朝鮮側からの第1回の報告時期について「常識的には年内」と語った。結果的にはこれも果たされなかった。本来なら年末の時点で野党やマスコミから追求されていたのだろうが、解散総選挙で国民の関心はリセットされてしまった。昨年後半期待が高まった分だけ認定被害者の家族も特定失踪者の家族も失望は大きい。

### 人質殺害事件と拉致事件の落差

拉致問題の停滞に追い打ちをかけたのがIS（いわゆる「イスラム国」）による人質殺害事件である。この事件への関心の高まりは逆に拉致問題への関心を低下させることにつながった。もちろん人質殺害はそれ自体許されないことだが、とにもかくにも自分の意志で行って捕らえられた2人に対し、拉致問題とは好対照でマスコミが報道し世論が高まると政府は強い関心を持って行動した。

安倍総理は後藤さん殺害について「罪を償わせるために国際社会と連携していく」と発言した。中谷防衛大臣は「非道であり、卑劣極まりない行動であり、激しい怒りを感じます。断固として対応していかなければならないということであり、このようなテロに屈することなく各国と連携して対応してまいります」「全く非道な、冷酷な、残忍な行動であって、断じて許されるものではありません。国際社会というのは法律で秩序をつくってそれぞれの国、それぞれの人々の安全を確保してできています。こういった行為が行われないように万全の、わが国としても対応をすべきだと思っています」とコメントしている。

拉致問題で総理や防衛大臣がこのような発言をしたのを聞いたことがない。防衛大臣に至っては拉致問題にはほとんど関わってすらいないがこれは本来異常と言えるのではないか。

交渉で帰国できる被害者は一部に過ぎない。金正恩のファミリーや工作機関の機密事項を知っている被害者を返すのはハードルが高いし、拉致をした日本人に成り代わる、いわゆる背乗り（はいのり）の場合本人が日本に戻れば成り代わっているスタッフが明らかになってしまう。救出のためには交渉以外の方法が必要不可欠になる。そこには必ず自衛隊が関わるはずなのだが、永田町や霞ヶ関、ついでに言えば市ヶ谷もその当たり前のことが完全に抜け落ちているのである（あるいは意図的にそうしているのかもしれない）。

### 続けられてきた日本への工作活動

北朝鮮は日本国内に固定作業員・協力者を多数置いて、おそらく戦後間もなくから今日まで運用してきた。そして工作船による作業員の不法な出入国と拉致、おそらくは日本国民の殺害なども含め明らかに日本に対する主権侵害行為を続けてきている。

かつて石川の北國新聞が取材したところ、県警が把握しているだけで昭和30年頃から約30年の間に約30件の北朝鮮作業員による密出入国事件があったという。作業員の侵入は大部分が発見されない。一説には95パーセントくらいの成功率だったとも言われる。もしその通りであれば単純計算で発見された30件以外に570件の発見されていない密出入国があることになる。おそらく何十年もの間、少なくとも1か月に1回は日本のどこかに工作船がやってきたのだろう。いや、多少方法は変えたとしても今も何らかの形で作業員の出入りは行われているはずだ。

ある省庁の資料には工作船の浸透経路を書いた地図があり、北朝鮮から出た線は東シナ海を回り、北海道の沿岸を通って日本海側に引かれている。矢印の先は福島県のいわき周辺、三河湾、高知などである。通信傍受をしていたら後ろから（つまり太平洋側から）電波が聞こえてきたという話もある。

北朝鮮だったのかどうかは不明だが私はしばらく前に作業員同士の情報の受け渡し現場を目撃したことがある。場所は西武新宿線の高田馬場駅のコンコー

スである。たまたま携帯に電話がかかってきて話をしながら前の階段を見ていると、上がりざまに何かを階段の端に置いていった男がいた。フィルムケースくらいの大きさだったと思う。その男はそのまま去って行った。

「何だったのだろう」と思いながら通話を続けていると、しばらくして別の男が階段を上ってきてそれを持って行った。説明する必要もないかもしれないが、直接の手渡し、いわゆる「ライブドロップ」ではなく、置く場所を決めておいて二人が直接接触せずにもものを受け渡す、「デッドドロップ」である。話には聞いていたが見るのは初めてだった。中に入っていたのがラブレターとか請求書でないことは明らかである。あらためて日本の平和が表面上のものであることを実感した。

私が代表をしている特定失踪者問題調査会では4年前からチームによる集中的な現地調査を行っている。「1万キロ現地調査」と名付けたこの調査は全国の拉致・失踪及び工作員密出入国に関わる場所を調査していくものだが、行くたびに次から次へと新しい情報が出てくるのである。

一昨年11月に山口の現地調査をしたときには元北朝鮮工作員（朝鮮労働党作戦部戦闘員）である李相哲氏（仮名）に同行してもらった。李氏は昭和57年（1982）6月19日に山口県長門市の青海島にゴムボートで上陸し、在日朝鮮人の工作員と思われる男性1名を北朝鮮に連れ帰っている。当時の状況は次のようなものである。

接線（在日工作員との接触）の時刻は午後10時となっており、沖合500メートルの位置から組長と2名でゴムボートに乗り手漕ぎで牛崎の鼻を目指した。途中で組長がシュノーケルをつけて岸まで泳ぎ、異常がないことを確認した後、無線機のスイッチ音（プレストーク音）だけで合図し、ゴムボートを接岸させた。組長が50メートル程離れた接線地点（海岸沿いの民家裏）に行き、石を打ち合わせる音と合い言葉で工作員と接触、李相哲が待機するゴムボートに乗せて帯同帰国している。打石信号はよく使われるが、この場合は両者が合計5回、つまり上陸した工作員が2回叩いたら待っていた方は3回ということで相手を確認したそうだ。

この場所は牛崎の鼻ないし半崎の鼻といわれ、筆者も何度も行ったことがあるが、陸地の側からは発見されにくく、海から入ってくる職員には入りやすい場所である。偶然ではなく、このような上陸地点は日本国内にいる職員・協力者が観光客を装って海岸線を歩き、適地を選定していったものだ。李氏は「自分は1回しか潜入しなかったが、それ以前にも牛崎の鼻は使われていたと思う。日本側に発見されるまでは継続して使うはず」と言っていた。

李氏は翌年（昭和58年）韓国釜山に半潜水艇で上陸浸透しようとして韓国軍に阻止され、同じ作戦部戦闘員である全忠男氏とともに逮捕された。その後転向して今は韓国の政府系機関に勤務している。

この話には後日談がある。1980年代と思うが韓国軍が李氏と全氏を使って上陸浸透阻止の訓練をしたことがあるのだそうだ。当時韓国軍の将校だった知人はこの訓練に参加したのだが、いつまで待っていても2人の姿が見えない、どうしたのだろうと思ってふと気がつくと後ろでラーメンを食べていたとのことだった。

海上からの浸透は極めて容易である。私が代表をしている予備役ブルーリボンの会（通称RBRA。予備自衛官と自衛官OBで構成する拉致問題解決のための民間団体）ではかつて新潟の海岸でシミュレーションを行ったことがあるが、幹事の一人である荒谷卓・初代特殊作戦群長は自ら固定スパイ役をやりながら「誰でもできる。コンバットダイバーを使う必要もない」と言っていた。

### 北朝鮮に全面戦争の能力はない

北朝鮮軍の状況については前回は書いたが、すでに大規模な戦闘を行う能力はない。南北の休戦状態が続く限り哨戒艦「天安」撃沈とか延坪島砲撃のような局地戦はいつでも起こり得るが朝鮮戦争のような全面侵攻は不可能である。ちなみに朝鮮戦争のときでさえ作戦計画書の原本はロシア語で書かれていたという。自力では戦争の計画も作れなかったということだ。弾道ミサイルによる攻撃は可能だろうが、通常弾頭であれば仮に日本本土に着弾しても被害は限定

されているはずだ。核兵器が搭載されていればもちろん脅威だが、ミサイル防衛を別にすればこちらが核武装していない以上抑止力は米国に依存せざるを得ない。

残る手段は特殊部隊の侵入による破壊行為で、これについては前述の様に上陸浸透が容易な状態で、国内の固定スパイにもほとんど手つかずの現状では留意すべきだろう。朝鮮人民軍全体としては兵士が栄養失調で脱営したり民間人の家に押し入って強盗事件を起こすなどともな軍隊と言える状態ではないが、100万人の軍隊の約1割を割いていると言われる特殊部隊は、李氏らが所属していた労働党作戦部の戦闘員なども加えるとおそらく陸自の総定員を凌駕しているはずだ。特殊部隊だけで戦争はできないが、政治的な脅しの材料としては十分使うことができる。

さらに、このような特殊部隊・工作機関の活動の一環が拉致問題であることは、特に幹部自衛官各位にはしっかりと認識してもらいたいのである。最近武力行使の要件緩和の議論で「新事態」という言葉が使われているが、いつ起きるか分からない「新事態」より、今既に主権侵害され国民が連れ去られている「現事態」の方が遥かに重要なはずではないか。今にはじまったことではないが日本の国防論議というのは与野党とも足下がすっぱり抜けているような気がする。

金正恩政権の基盤は決して安定したものではない。政権ナンバー2と言われた張成沢を処刑したことは中国との関係を決定的に悪化させている。中国にとって何か重大な局面が訪れたとき、中国共産党は「血で結ばれた友誼」を弊履のごとく捨てるはずだ。

金正恩体制に対してクーデターが起きる可能性は低い。何重にも監視網が張り巡らされており組織的な反抗は極めて難しい。起きるとすれば金正恩への側近によるテロだろう。あるいは北東アジア全体のバランスが崩れた中で北朝鮮がその渦に巻き込まれるということもありうる。

前にも書いたように、朝鮮半島の国家はその運命が大きく左右されるとき、特に近代は必ず主役の座からおろされた。日清、日露戦争しかり、金日成が自

らはじめた朝鮮戦争しかり。この現実を認識して何とか自立しようとした政治家は朴槿恵・現大統領の父朴正熙だったが、その功績によって発展した韓国では逆にそれが省みられなくなっている。おそらくはまた同じことがくり返されるのだろう。

### 北朝鮮は変質している

北朝鮮はすでに変質している。中央からの物資が来なくなって各省庁や軍、あるいは道などの日本で言う自治体はそれぞれが外貨稼ぎをしなければならなくなった。北朝鮮では1990年代後半の大量飢餓の時代に人口の1割が餓死ないし飢餓による病死をしたと言われるが、そこを生き残った人たち、つまり配給に頼らなくても生きていける人たちが今は残っている。かつて北朝鮮は配給によって国民を統制した。配給がなくなればその統制はきかなくなるのである。

さらに大きな変質は情報の流入である。今平壤などでは大部分、地方でも一定の割合でDVDプレーヤーがあり、韓流ドラマや音楽など、様々な南の文化が流れ込んで来ているという。場所によっては韓国のテレビを直接視聴できるそうだ。ある人の話では平壤の子供の間では韓流のことを知らないといじめられるとか、ソウルの言葉が格好良いということで真似しようとするといった話まで聞かれている。このようなことは10年前には想像もできなかったことだ。

私が代表をしている特定失踪者問題調査会では10年前から対北短波放送「しおかぜ」を流している。特定失踪者や政府認定拉致被害者の家族の声やニュース、時事解説などを送っているのだが、これに対して北朝鮮からは妨害電波が流されている。妨害が効くのは平壤周辺だけと思われるが、ともかく北朝鮮の体制にとってマイナスになるのだと思う。私たちのような対北放送は韓国では政府機関がやっているものを別としても自由北韓放送、北韓改革放送、開かれた北韓放送、自由朝鮮放送などがあり、米国ではRFA、VOAが朝鮮語放送を送っている。北朝鮮で多数の人が隠れてこれらの放送を聴いていることは脱北者の証言でも明らかである。帰国した日本人拉致被害者や曾我ひとみさんの夫



ジェンキンス氏もラジオを聞いていたと語っている。

また韓国からはビラが民間の手によって北朝鮮に飛ばされている。長さ10メートルを超える大型の風船は1回で数千枚のビラを飛ばすことができ、時限装置で空中から散布する。ラジオがなければ聴けない放送と異なり、ビラは情報量は少ないが誰でも読めるため効果は大きく、北朝鮮は20回以上もビラ撒布を止めさせるよう韓国政府に申し入れている。私もこの活動には何度か参加したが、一度タイマーの不具合で打ち上げて間もなくビラが飛散したことがあった。手分けして落ちたビラを回収したのだがかなり大変で、北朝鮮では人民軍を動員して回収しているというのがとてもすべて拾うことはできないだろう。

情報による変質は不可逆的なもので、止めることはできない。最後に残っているのは恐怖による支配、つまり政治犯収容所や公開処刑、そして連座制などである。これがあるから経済的に放置状態になっても政治的なことでクーデターや組織的犯行が起こりにくいのである。言うまでもなく、このような状況で金正恩が自主的な国家改革をなしうる可能性はない。そしてそれはどこかの時点でダムが決壊するような、突発的な変化につながるだろう。

### 朝鮮半島を避けて国防は考えられない

さて、最初に書いたように北朝鮮が交渉で拉致被害者を全て返すことはあり得ない。仮に日本政府が本人に接触できても彼らは周囲を警戒して簡単に帰るとは言わないだろう。これは既に帰国している蓮池さんたちもそうだった。曾我さんの夫ジェンキンス氏は小泉総理の第二次訪朝のとき、総理が直接日本に行くよう説得した。それでもジェンキンス氏はイエスとは言わなかった。もしその場でイエスと言えば、一旦総理と引き離された後で「ジェンキンスは気が変わった」ということにされて日本には行けず、逆に収容所に送られてしまったかも知れない。北朝鮮というのはそういうところであり、だからこそ全ての被害者を取り返すためには北朝鮮の体制を変えることが必要なのである。もちろん、日本政府が北朝鮮の体制を変えとは言えないだろうから、これは民間

の仕事でもあるが。

また、金正恩へのテロ等で北朝鮮の体制がコントロールできなくなったとき、北朝鮮にいる邦人、すなわち拉致被害者をはじめとして日本人妻、戦後残留者を帰国させることが必要になるが、これは消去法でいって自衛隊以外にできる組織はない。邦人救出にあたって「相手国の同意」という条件は、少なくとも拉致被害者については当てはまらないだろう。日本の同意があつて拉致をしていったわけではないのだから。

これについて予備役ブルーリボンの会では荒谷元特戦群長や伊藤元海自特警隊前任小隊長らを中心にそのような場合の邦人輸送（現行法）ないし救出（法改正後）の二つのシミュレーションを去る2月26日国会の議員会館で行った。最後にその一部のみをここに載せておく。読者各位ならこの状況でどう対処するだろうか。

ちなみにこのシミュレーションについてはYouTubeなどを検索すると出てくるので機会があればご参照いただくと幸いである。

### 1 一般状況

- (1) 20XX年、平壤で騒乱が発生し北朝鮮全国に拡大、政府は事実上の統制力を失い、一部市民は暴徒化している。
- (2) 国連は、北朝鮮政府に外国人の保護と国民に対する人道的対応を要求したが、北朝鮮政府内も混乱をきたし、無政府状態との認識をしめた。  
これに伴い、各国は自国民救出のための行動を開始した。
- (3) 各国の自国民救出活動に対し、軍による妨害行動は無く、一部暴徒化した小集団以外に全体的に妨害行動は見られない。
- (4) わが国政府は、北朝鮮に邦人を保護する責任ある政府が存在しないと認め、国連決議に基づく国際社会からの要請と、邦人輸送を安全に実施できるとの判断を示し、自衛隊に邦人輸送のための行動を命じた。
- (5) 行動を命じられた自衛隊は、平壤等主要都市において各国と連携し、邦人等輸送を順調に遂行しつつある。
- (6) わが国政府は、地方都市に確認された拉致被害者の輸送について、日本

単独で遂行することに決し、自衛隊に清津に確認された拉致被害邦人等の輸送を命じた。

## 2 作戦環境

- (1) 米国は情報の提供について協力する旨伝えてきている。
- (2) 韓国は、自衛隊の港湾や飛行場の使用について拒否する旨を伝えてきている。
- (3) 輸送対象は、清津に確認されている拉致被害邦人及びその家族10名である。
- (4) 邦人輸送作戦は、平成25年11月29日に閣議決定された「自衛隊による在外邦人等の輸送の実施について」をうけて平成25年11月22日改正された自衛隊法を根拠とする。

日本国民と国土、そして国体を守るのが防衛省自衛隊の役割である。その本質を考える上で朝鮮半島は避けて通れない。日清日露の戦いがそうであったように。

# RIKUSEN KENKYU

THE JOURNAL OF GROUND WARFARE

April 2015

## CONTENTS

### ARTICLES

**The Significance and the Application of “Priority Strike Targets Selection”**

**By Yoshinori TAKEDA ..... 1**

RIKUSEN GAKKAI



The Japan Ground Warfare Academy